



平成23年4月25日

卓話 『書は人なり』

社団法人 日展 常務理事

杭迫 柏樹 様

まずは東日本大震災で被災された方、本当に大変だと思います。数十年ぶりの本当の国難が今度の大地震災だと思いますと、これからは戦後といわずに震後というのが正しいと思いました。この民族は戦後数十年の間に自分たちの民族の色合いを忘れてしまった。そこでこの時、日本人がどんな民族だったのか再確認する絶好のチャンスだと思います。

日本は平安の中頃に遣唐使を廃止しました。これは多分日本の民族の色合いが濃厚になり、中国に学ぶものが少なくなって廃止したわけですが、それと前後して仮名が開発され完成されていきます。そして廃止の9年後にはもう純粋の日本文学の古今和歌集が生まれ、書道にも三跡が生まれます。また源氏物語や枕草子など世界に誇る日本の文化が一斉に花開いた。そういうふうには歴史を見ると、これからの何年、何十年が、もう一度日本の、日本文化の黄金時代を迎えるきっかけになると思うんです。

「書は人なり」というのはいささか乱暴な言い方で、本当は「書はその人の如し」が正しいと思います。書の魅力はそれを書いた人の魅力と重なり合うんです。上手下手ではなく、いい悪いで見る。いい書とはいつまで見てもあきないもの。武者小路実篤先生のお書きになったものは決して上手とは言えませんが、味わい深く、やっぱりいい字ということになるわけです。

書というのは割と感覚的で、例えば一本の線があってこの線を切ったと想像します。よい書はその切り口から鮮血がほとぼしる感じ、またはきれいな水があふれ出る感じ。膿がでてくる感じとか干からびて何も出てこない感じ

ていうのが悪い線。生き生きしたすがすがしい感じというのはいい書です。書は一口で言うと切り口の芸術、線の芸術。書が形の芸術と言った人は過去いないですね。人の字を真似すると形はそっくり

になるけれど、線はその人自身の生き方をそのまま表すから真似が出来ない。ただ技術も伴いますので実際にやらないといけない。このやり方、日本の芸道の世界では守、破、離っていいです。最初の守は先生とか古典のよいところを一所懸命学んで守ります。それが限界まで来ると破と言って自分独自のものが芽生えるわけですが、最後にはそこから離れて無碍自在になる。剣なら剣を捨てる、釣りなら釣糸、釣針を捨てる。離というのはそういうことですが、そうすると書家の場合は筆を捨てることになりまますから、理想の境地であっても本当はあり得ない。外国では知・情・理などと分けて人間の分析をしますが、悟性というのを加えないと日本の芸道は理解できない。書の場合も良寛さんの字はもう悟性の世界の作品です。あれを見たときたんにまいりましたというほど素晴らしい。直感的にその悟性を感じるからだと思うんです。

今、鎖国状態に近い立場に置かれて、静かに本当に日本人の本性、色合いは何だったのかを考えていきたいと思うんです。

失礼いたしました。

